

## 第6回情報共有基盤推進委員会

### 議事概要

#### 1. 日時・場所

2018年2月28日(水) 13:00~15:00

経済産業省 104 各省庁共用会議室 (別館 1 階 104 室)

#### 2. 出席者

##### 委員長

須藤 修 東京大学 大学院 情報学環・学際情報学府学環・教授

##### 委員 (50 音順)

伊藤 昌毅 官民データの相互運用性実現に向けた検討会 主査  
東京大学生産技術研究所 助教

武田 英明 共通語彙基盤ワーキンググループ 主査  
国立情報学研究所 情報学プリンシプル研究系 教授

田中 啓一 一般社団法人コンピュータソフトウェア協会 (CSAJ) CSAJ 副会長  
CSAJ 技術委員会・委員長  
日本事務器株式会社 代表取締役社長

長山 一 一般社団法人日本情報システム・ユーザー協会 (JUAS) 参与

橋田 浩一 一般社団法人電子情報技術産業協会 (JEITA)  
ビッグデータ工学専門委員会 委員長

東京大学大学院情報理工学系研究科ソーシャル ICT 研究センター 教授

林 史典 文字情報基盤ワーキンググループ 主査  
聖徳大学 言語文化研究所 所長

(ご欠席)

田原 幸朗 一般社団法人情報サービス産業協会 理事

##### オブザーバー

内閣官房 情報通信技術 (IT) 総合戦略室

##### 事務局

経済産業省商務情報政策局 総務課 情報プロジェクト室

独立行政法人情報処理推進機構 (IPA)

#### 3. 議事概要

##### 3.1. 開会挨拶 (経済産業省 中野情報プロジェクト室長)

文字情報基盤の国際標準化が完了、共通語彙基盤もかなり認知されてきている。今年度は

「官民データの相互運用性実現に向けた検討会」を設置、今までの実績を振り返り、今後の戦略を検討した。結果について、後ほどご報告するのでご意見をいただきたい。

### 3.2. 事業進捗状況について

資料1に基づき、2017年度の文字情報基盤、資料2に基づき、2017年度の共通語彙基盤の取組みについて報告。

2017年12月に発行された文字符号の規格書 ISO/IEC 10646:2017 に、提案していた漢字全てが掲載された。これをもって、国際規格化は完了。一部、追補版への掲載を待つものが残っているが、それも間もなく発行の見込み。今後は IMI の事業の一環として普及策を進めていく予定である。

長きに渡り膨大で緻密な作業をご協力いただいた関係者の皆様に敬意を表したい。

共通語彙基盤事業は、基礎技術の整備、基礎データ作り、セミナーや資料の公開等基本サービスの3本立てで相互運用性の実現に向けたデータ作りを実施。2017年度には、IMI 語彙記法、データモデル、構造化項目名等の仕様書を発行した。

IPA と連携して語彙等の構築を行う「IMI パートナー」との連携手順などをまとめた文書も公開。パートナーは、現在10組織となった。現在はパートナーと個別に連携し、そこから知見を収集するという目的で事業を進めているが、次の段階ではそこで集めた知見をまとめた文書を公開し、それに基づいてパートナーの自主的連携が進むようにしてゆく。

開発を進めてきたツール類は、間もなく公開できる見込み。

### 3.3. 「官民データの相互運用性実現に向けた検討会」報告

資料3に基づき報告。データの相互運用性実現への戦略を検討するため、「官民データの相互運用性実現に向けた検討会」を設置し、3回の会議を実施した。

民間組織や自治体の現場の幅広い分野の委員構成となり、現状報告やご意見をいただき、活発な議論が行われた。

議論の中で、これまで、オープンデータの構築について多くのモデル事業が行われたものの、持続的な発展へつながったものは少なく、「モデル事業疲れ」といった状況が起きていることが指摘された。また、理想を追い求めすぎたため、データを活用する側がついてこられないといった問題も指摘され、利用拡大の観点から、より現実的、実装主義的な取り組みが必要ではないかとの指摘もなされた。

### 3.4. 政府の取組みと今後の方向性について

資料4に基づき、2017年度の政府の取組みと方向性について報告。

Society5.0 の重点分野を連携する中核に共通語彙基盤を据えた議論が開始されている。デジタルガバメント実行計画においてもデータ標準化の重要性が指摘され、共通語彙基盤がその中核に位置づけられている。デジタル改革の基盤整備には文字・語彙の整備が重要課題である。国際協調、官民連携した取り組みが必要である。

### 3.5. 質問・ご意見

- 文字情報基盤は、法務省の戸籍の議論でも取り上げられており、全省的に大きな影響力が出ている。
- ユースケースを定めずに進めると散漫になってしまう。共通語彙基盤に、自動運転など、「目の色が変わるような」ターゲットがあると良い
- 「検討会」を設け、第三者的観点から共通語彙基盤について評価を行ったのは大変よい取り組みであり、今後もこのような進め方が望まれる。IMI は、分野を超えた全てのデータがつながることを目標としてきたが、検討会では「相互運用性」についてももう少し緩い考え方をしているようだ
- 推奨データセットのコードについては IPA が関わるのか。
  - IMI としては、コードそのものの整備よりも、これらのコードの参照のし方を共通化する仕組みを準備すべきと考えている。
  - コードについては、「検討会」でも整備の必要性について議論があった。参照の方法等は議論すべきテーマである。
  - コードの不統一が混乱を招く原因となった事例もあり、重要な取り組みである
- システム調達の仕方の見直しも重要になってくる。
  - 自治体が一部データを公開することを前提としたシステムを作る際など、共通語彙基盤を活用する調達仕様をルール化することも必要ではないか。
- 様々なシステムが API で連携する世界になってきている。API エコノミーからはじき出されない様な国際協調の取り組みが必要である
- ユーザ企業から見て、企業を超えた相互運用性の必要性を感じる
- 災害対応についても、情報のスキーマ等の統一は不可欠だ。
- Society5.0 の図などを見ると、共通語彙基盤があれば、どんなデータも連携出来るような、共通語彙基盤は技術を超えた魔法の道具に見える。出来るものと出来ないものを明確化すべき。
  - コア語彙とドメイン語彙の適切な使い分けなどにより対応可能なのではないか
- 災害、観光情報など、翻訳について検討しているのか。
  - コードなどには対訳を用意する必要がある。
  - データが構造化され、メタデータがつけられると翻訳は容易になるだろう。
- 「検討会」ので指摘された課題も踏まえ、今後の事業を計画してゆきたい

### 3.6. 閉会

本委員会は原則年一回の開催を予定しているが、Society5.0 等の急速な進展がある等で臨時に開催することはあり得る。

以上